

## 受領者投稿

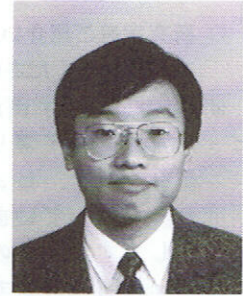
## 新しい発想を潤う泉

和歌山大学システム工学部デザイン情報学科コンピュータ支援設計講座 助教授 陳 謙  
(第8回受領者)

研究者にとって、新しい発想は命である。新しい発想は、ある研究課題について時間をかけて専念して研究を行う過程において生まれることが多いのだが、時には今までの研究分野を離れて、まったく新しい研究を始めるときに生まれることも少なくない。筆者は平成9年度に「仮想現実感技術を用いた破片からの遺物の復元」という課題で助成いただいた。それはちょうど奈良先端科学技術大学院大学に転任して2年たったときだった。転任前は主に、動画像処理、ヒューマンインタフェースと顔画像処理に関する研究を行っていたが、新しい研究室では、初めてVR、コンピュータグラフィックスと3次元計測に実際に携わった。当時、同研究室のある研究者が文化財のデジタル保存に関する研究を行い、博物館や考古学研究所に行き、データの採集で忙しい毎日だったが、筆者は3次元コンピュータグラフィックスとVRを使いこなすために猛勉強していた。ちょうどその時期に、大学院時代の先輩に会い、彼も考古遺物のデジタル保存に興味があり、VRを使って何かできないか二人で雑談をした。そこからCGで仮想破片を合成するアイデアが生まれ、VR技術で破片の接合作業を行う可能性について考え始めた。一人の修士学生と一緒に予備実験を行い、簡単なデモプログラムを作成した。研究を更に進展させるために、精密な3次元形状計測、視点を追従する立体映像の提示などの難題を解決しなければならず、そのために数多くの研究機材が必要であった。そのとき、貴財団の助成をいただき、研究を立ち上げることができて非常に助かった。

名実ともに研究者であり続けるために、新し

いものを常に追い求めなければならない。あれからもう7年の歳月が流れたが、筆者の場合、転勤、昇進などの機に新しい研究をやり始めてきた。すべては興味があるから始めたのではなかったが、結果的には自分の視野を広め、新しい発想が生まれるという良い結果となっていた。



一つの研究分野に専念し、その分野の最先端を追い続けていたら、研究の一貫性が保たれ、関連する研究実績が残るのであろう。そうすると、文部科学省の科学研究費などの助成をえられるような研究にもつながっていくと思う。一方、研究の新規性、有意義性を重視する貴財団は、新しい分野に踏み入れる勇気のある研究者にとって、非常に有難い存在である。研究助成の目的の一つは新しい発想を育てることだと思う。貴財団の益々のご発展を祈りするとともに、今後も新しい発想を発芽させるための泉でありつづけることを心よりお願いするしだいである。